

ゴマサバ *Scomber australasicus*

日本にサバ類はゴマサバとマサバの2種が生息していますが、高知県ではゴマサバが多く、8～9割を占めます。ゴマサバは、大きくなると写真のように体の下側にゴマを振ったような黒い斑点があることから、この名がついています。また、マサバよりも体高が低いことから、「まるさば」とも呼ばれます。味は、マサバと比べて、季節を通じて変化が少なく、夏はゴマサバの方がおいしいといわれています。土佐清水市の「土佐の清水さば」はこの魚です。



生物特性

各年齢の尾叉長と体重は、1歳が30cm (300～400g)、2歳が33cm (400～500g)、3歳が35cm (500～700g)です(図1、図2)。土佐清水では尾叉長46.2cm、体重1,593gという大きな個体が水揚げされたことがあります。マサバと比べると暖海性、沖合性が強いという特徴を持っています。

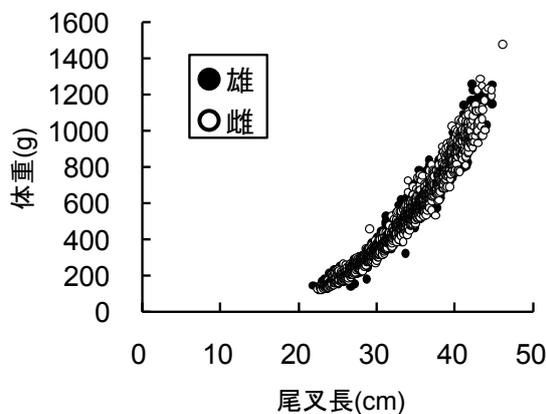


図1 高知県産ゴマサバの尾叉長と体重の関係(昭和54～平成28年)。

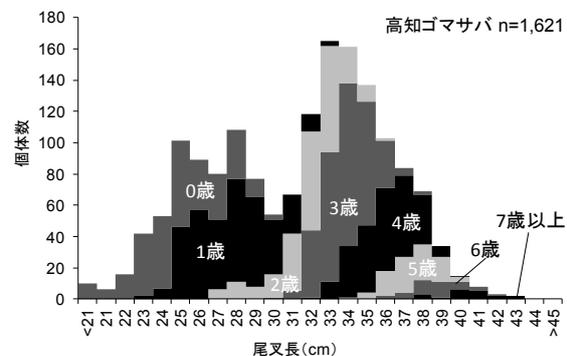


図2 高知県産ゴマサバの尾叉長別年齢組成(平成23～28年)。

ゴマサバは主に30cm以上で成熟を開始し、伊豆諸島以南の太平洋～東シナ海の様々な場所で産卵します。本県では室戸岬周辺、足摺岬周辺が産卵場となっています。主な産卵期は2～4月で(図3)、3～4月に高知県沿岸の定置網ではサバ仔と呼ばれる尾叉長5～15cmの稚魚が見られます。ゴマサバは回遊魚で、多くは6～8月に北上します。北上したゴマサバは主に東北～常磐地方の沖合域で成長した後、翌年3～5月

に高知県まで南下し、各地で漁獲されます。3歳以上の大型魚になると、一部は大きな移動を行わず、産卵場周辺に留まるようになります。

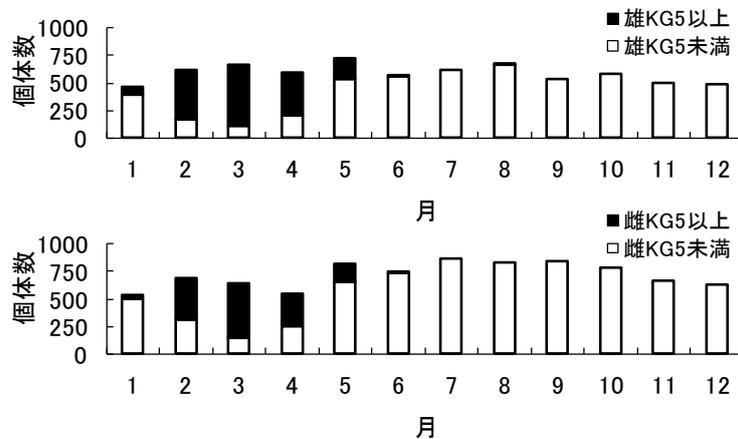


図3 高知県産ゴマサバの成熟係数 (KG) の推移 (昭和 54~平成 28 年).

資源動向

高知県で漁獲されるゴマサバは主に太平洋系群に含まれ、一部東シナ海で生まれた群も来遊します。ゴマサバ太平洋系群の資源量は平成 16 年 (2004 年) に卓越年級群が発生し、50 万~80 万トンと高水準を維持していましたが、平成 22 年以降、発生量が少なく、資源量は減少傾向にあります。このことから、平成 28 年度 (2016 年) のゴマサバ太平洋系群の資源評価は、水準が「高位」、動向が「減少」傾向にあるとされています。

県内の漁獲動向

高知県内の漁獲量については、ゴマサバはマサバと一緒に「さば類」としてまとめられている地域があります。そのため、正確な量は把握できていませんが、土佐湾の定置網を除いて、ゴマサバ主体です (ゴマサバ・マサバの混獲率はマサバの項を参照してください)。

高知県の最近 10 年間のさば類漁獲量は 3,500~10,000 トンの間で (図 4)、ゴマサバ太平洋系群の資源増加とともに平成 19 年まで増加しました。しかし、平成 23 年以降、漁獲量は減少に転じました。この原因は、平成 21 年以降卓越年級群が出現していないため、高知県海域へのゴマサバの来遊量が減っていることが考えられます。

釣漁業は主に足摺岬周辺と室戸岬周辺で操業が行われていますが、足摺岬周辺の漁場で最も大きな水揚地である土佐清水では平成 22 年以降、高齢化やさんご漁への転換により立縄漁の漁業者が減少し、水揚量が大きく減少しています (図 4)。

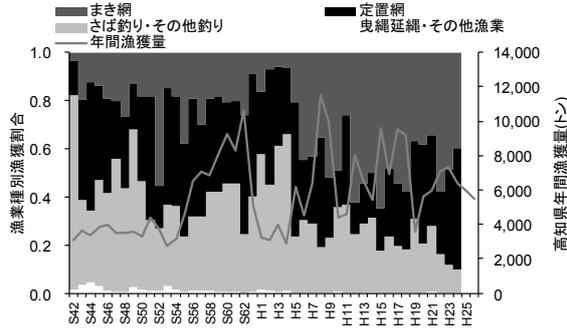


図4 高知県のさば類漁獲量と漁法別漁獲量割合の推移（昭和42～平成26年、平成25年以降の漁法別漁獲量データはなし）。

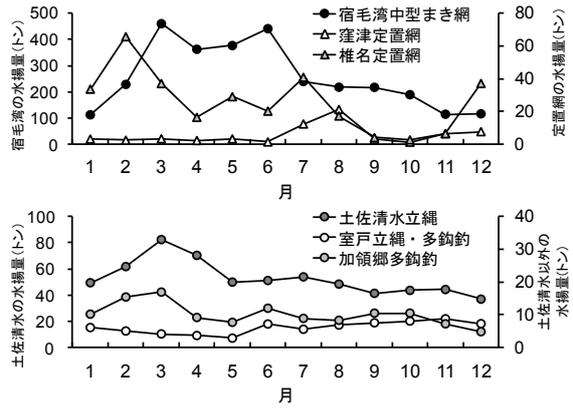


図5 各漁法における月別平均水揚量の推移（平成17～26年）。

ゴマサバの漁獲はまき網、定置網、釣漁業（立縄、多鈎鈎等）でほぼ全てを占め（図4）、漁法によって漁獲対象年齢が異なります。まき網は3～6月に主に北から南下回遊してきた1～3歳を漁獲します（図5上、図6）。定置網漁業は1～3月の産卵群と7・8月に多く漁獲していますが（図5上、図6）、様々な年齢で入網します。釣漁業は主に3歳以上の大型魚を対象とし（図6）、2～4月と6月以降に水揚量が増加します（図5下）。土佐清水の立縄漁は一年を通して水揚があり、他の漁業が一時的に来遊してきた魚群を対象とするのに対して、漁場に留まっている魚を獲るのが特徴です。

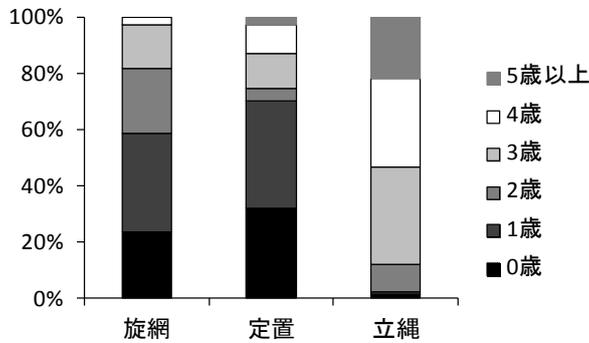


図6 高知県産ゴマサバの漁法別年齢組成（平成23～28年）。